

# 西郊民俗

第二六三号

令和五年（二〇二三）六月

麦打ちの後処理または代替としての「麦おし」	榎本直樹	1
―白と杵で「おす」麦脱穀の最終段階		
岩船山の孫太郎天狗と孫太郎稲荷	林京子	15
富山県魚津市古鹿熊におけるトリモチ猟	森俊	22
雑報		23

西郊民俗談話会

## 西郊民俗談話会会則

- 一、本会は西郊民俗談話会と称する。
- 二、本会は会員相互の連絡を保ちながら、民俗学の研究を推進することを目的とする。
- 三、本会は、次の事業を行う。
  - (1) 会誌『西郊民俗』等の発行。
  - (2) 研究会等の開催。
  - (3) その他。
- 四、本会の会員は本会の目的に賛同して入会の手続をとったものとする。
- 五、本会の会員は会費として年額二、〇〇〇円を納入するものとする。
- 六、本会は会務の執行のために委員若干名を置き、うち一名を代表委員とする。委員の選出は総会において行い、その任期は二年とする。
- 七、本会は必要に応じて顧問を置くことができる。
- 八、本会は少くとも毎年一回の総会を開催するものとする。
- 九、この会則の変更は総会の決議による。

### 『西郊民俗』投稿案内

『西郊民俗』は年四回(三・六・九・十二月)に刊行しています。本会会員であれば、どなたでも投稿することができます。民俗学に関する報告・論説・記事であるならば、いかなる地域のものでもかまいません。論考・調査報告・資料紹介・資料翻刻・問題提起等、原稿の長短に関わらずお寄せください。短報も受け付けています。

投稿に際して次の点に留意してください。

#### 一、投稿方法

できるだけ電子データ原稿をお願いします。本文・写真・図表を収

録したCD・メモリースティック等のデータメディア郵送、またはメール送信でお送り下さい。そのプリント紙をともに郵送して下さい。メール送信でも、プリント紙は郵送して下さい。もちろん手書き原稿も受け付けています。

#### 二、写真・図等

写真・図等は、電子データの本文に貼り付けしないで、写真一点ごとの別ファイルにしてください。

#### 三、校正

執筆者校正は、初校を郵送しますので返送して下さい。執筆者校正は初校のみといたします。注の付け方、文法上の整理等、本文の体裁について、編集上の調整をする場合があります。

#### 四、『西郊民俗』PDFのインターネット公開

二五八号から、西郊民俗談話会のホームページにおいて、会誌の発行後一年を経過した時に、PDFによるインターネット公開を行います。今後の投稿に際して、インターネット公開を了承した上での投稿をお願いします。既刊のバックナンバーのインターネット公開については、今後検討していきます。

#### 五、原稿送り先 編集担当

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四一六七七

Eメール [hotosano@yahoo.co.jp](mailto:hotosano@yahoo.co.jp)

#### 『西郊民俗』バックナンバー案内

既刊分の会誌の販売価格は一部五〇〇円です。在庫分は二四九号から受け付けています。会務担当宛お申し込み下さい。

## 麦打ちの後処理または代替としての「麦おし」

―白と杵で「おす」麦脱穀の最終段階

榎本直樹

はじめに

埼玉県南・東部などに、麦脱穀の唐竿の作業をムギオシ、ノゲオシなどという例があることに着目し、麦打ち台、唐竿、白・杵などの作業や足で踏む作業に、「〇〇おし」という呼称が広く共通して見られることを紹介したことがある。この呼称が、さまざまな作業動作を含むものであることから、脱粒・脱芒のため、穀物に棒などの固形物を押し当てて圧する「おす」作業を基礎として、別の脱穀用具の作業動作にもその表現が応用、流用され、「おす」が広く脱穀の作業動作を示すものとして用いられた。しかし、一方で、「打つ」などの確な表現が用いられ、置き換えられることで、次第にその領域を狭め、近代には「〇〇おし」という語彙や、埼玉県南・東部ほかの「クルリボウでおす」という表現に、名残をとどめているのではないかと推測したものである。<sup>1)</sup>

埼玉県内でムギオシを唐竿の作業とすのに対して、神奈川県川崎市や山梨県南巨摩郡早川町奈良田でムギオシを白・杵の作業としていることは、その時点で把握していた。ところが、その後、都内の離島でもムギオシを白・杵の作業とすること、東京・多摩地域の近世・近代の日記に白・杵の作業を「麦おし」「おしもの」と記すものがある<sup>2)</sup>と知った。「麦おし」やムギオシは日記や一部地域の民俗語彙であり、「おしもの」は日記にしか見られない。しかし、これらは、唐竿による麦打ちの後処理、またはその代替作業として、麦脱穀の一面を担い、俵などに収めるまでの重要な位置を占めるものである。

ここでは、麦脱穀における白・杵の役割を位置づけるとともに、それを象徴する「麦おし」「おしもの」という呼称について考察してみたい。

### 麦の脱穀と白・杵の役割

小川直之氏は、大正二年『日本主要農作物耕種要綱』や昭和十二年『麦類耕種要綱』<sup>3)</sup>により、日本全国の脱穀具・脱穀法を一覧表に示している。それを見ると、連枷(唐竿)とともに、白の作業が少なからず見受けられる<sup>4)</sup>。関東で白の記述があるのは埼玉県と神奈川県である。『麦類耕種要綱』本文に、埼玉県では「人力用足踏式廻転脱穀機」による脱穀後、

篩(大型)ヲ通シ或ハ風選ニヨリテ切穂、芒等ヲ選別シ、切穂ハ連枷ヲ以テ叩クカ、白ニテ軽ク搗キ、最後ニ唐箕選ヲナシ、莖ニ拵ゲテ乾燥スルモノトス

とあり、神奈川県は、

乾燥中ハ適宜連枷ニテ打ツカ、或ハ白搗ヲナシテ芒ヲ落シ後、篩、箕、唐箕等ヲ用ヒテ調製ス<sup>5)</sup>

とある。これらの記述によると、稗から落ちた穂の脱穀に関して、連枷と白とは、同列であるようにも受けとれる。

小川氏はまた、近代・農務局などの報告書から日本全国の脱穀具・脱穀法を分析し、日本の脱穀法に、扱き落し法、穂叩き法、打付け法、焼落し法、穂搗き法、足踏み法、手揉み法の七とおりあることを指摘し、麦の脱穀の工程については、千菌扱き法、焼麦法、打付け法などによる一次脱穀と、穂叩き法、穂搗き法による二次脱穀という二段階に整理している<sup>6)</sup>。この穂搗き法が白・杵の作業である。

これを参考にしつつ、関東南部の麦脱穀の作業工程を並べ、そこに「〇〇おし」とそのほかの代表的な呼称を加えると、次のように表すこ

とができる（乾燥の工程を加えたが、選別の過程は省略した）。

一次脱穀（麦束から穂を分離する）

左記のABCから一択する。

A 打付け法 麦打ち台で麦の穂を打ち落とす

〈呼称例〉ムギウチ、ハシゴブチ、サナオシ

B 千歯抜き法 千歯抜きで麦の穂を抜く

〈呼称例〉ムギコキ、ムギコギ

C 焼麦法 麦を焼いて麦の穂を落とす

〈呼称例〉ムギヤキ、ヤキホ

穂の乾燥

晴天時に一次脱穀を行い、天日干しして二次脱穀に移る。

二次脱穀（脱粒と脱芒）

唐竿＋臼の場合は、D＋Ea、またはD＋Faとなる。

臼のみの場合は、Ebのみ、またはFbのみ。

D 穂叩き法 唐竿で穂を打つ

〈呼称例〉ムギオシ、ノゲオシ、ムギウチ、ボウチ、ボウウチ

E 穂搗き法 臼・杵で搗く

a (Dの後処理) 〈呼称例〉ムギオシ、ノゲオシ、ヨヅキ、

コオシ、ツノオシ

b (Dの代替) 〈呼称例〉ムギオシ

F 足踏み法 臼や桶、箆に入れて踏む

a (Dの後処理) 〈呼称例〉ノゲオシ、ツノオシ、ノゲオリ

b (Dの代替) 〈呼称例〉ムギフミ

粒の乾燥

乾燥具合に応じて粒を天日干しする（DEFの前後）

〈呼称例〉ムギホシ、ツブホシ、コボシ

この中の二次脱穀、E穂搗き法が臼・杵の作業であるが、これはF足踏み法とも関わっている。EかFいずれかを経て、俵などに麦粒を収納し、脱穀作業が完了する。粒の乾燥は、DEF前の場合もあれば、後の場合もあった。DEF後に改めて行い、呼称も明確な報告があるのが、もっぱら山間地（ムギホシ 埼玉県秩父郡皆野町、ツブホシ 東京都西多摩郡檜原村、コボシ 山梨県富士吉田市新屋・新倉）なのは、天候や日照など地形条件も関わっていると考えられる。

実際の事例を見るために、埼玉、東京、神奈川、山梨などでEFの事例を取り上げている報告を中心に、「麦の脱穀作業の例」をまとめた。民俗調査の報告では、唐竿の作業にはほぼ必ず触れられているものの、臼・杵の作業に触れられたものは少ない。脱穀作業全体の説明は省略し、以下、臼・杵の作業の部分のみ、事例を紹介していく。文中、特に断りが無いものは、この一覧表の出典と同じである。

唐竿の後処理としての臼・杵の作業

唐竿による穂打ち作業の後、まだ穂から落ちきれない粒を落したり、粒先端の突起物であるノゲ（芒）をのぞいたりするために、臼・杵で作業することがある。具体的には、臼に麦を入れて杵で軽く搗くか、臼や桶、箆などに入っている麦を足で踏むか、である。踏む作業は、稲や麦の脱穀法ではあまり知られていないが、粟、黍、蕎麦など雑穀の一脱穀法として足踏み法があることは、前述のとおり小川氏が指摘している。

1 埼玉県さいたま市旧浦和市域では、麦打ち台や千歯抜きによる一次脱穀の後、二次脱穀として唐竿の穂打ち（ムギオシという）で脱粒・脱芒し、粒になった麦を藁に広げて天日干しする。コオシといって、これ

麦の脱穀作業の例

	地域	一次脱穀（穂落とし）	A B Cほか	二次脱穀（脱粒・脱芒）	上段・D唐竿	下段・E F臼杵ほか	工程*
1	埼玉・さいたま市旧浦和市	方法 A麦打ち台 B千歯抜き C麦を焼く	各用具の呼称/作業呼称(場所) ムギブチバシゴ/ムギウチ カナコキ コキ、タケゴキ、カナゴキ/ムギコキ	D唐竿の呼称/作業呼称(場所) クルリボウ/ムギオシ、ノゲオシ、ボウブチ クルリボウ/ボウウチ、ムギボウウチ、ムギウチ、ムギコナシ	E F臼・杵ほかの作業の目的/内容/呼称 (記載なし)/二斗張りのツキウスと杵で搗く/コオシ、ヨツキ	他用具	
2	埼玉・上尾市	A麦打ち台 B千歯抜き	ムギウチバシゴ/ハシゴブチ	クルリボウ/ノゲオシ	脱芒/二斗張り臼と杵で搗く/コオシ	B D F	
3	埼玉・戸田市	A麦打ち台 B千歯抜き	ムギウチバシゴ/ムギブチ	クルリボウ/ノゲオシ	脱芒/二斗張り臼と杵で搗く	A D E	
4	埼玉・蕨市	A麦打ち台 B千歯抜き	ムギウチバシゴ/ムギブチ	クルリボウ/ノゲオシ	脱芒/二斗張り臼と杵で搗く	A D E	
5	埼玉・川口市旧鳩ヶ谷市	A麦打ち台 B千歯抜き	ムギウチバシゴ	クルリボウ/ムギウチ	脱芒/二斗張り臼と杵で搗く	A D E	
6	埼玉・ふじみ野市旧上福岡市	A麦打ち台 B千歯抜き	ムギウチダイ	クルリボウ/ボウウチ(物置の土間)	脱芒/タチウスに入れて杵で搗く (選別後残る穂を藁打ち用ヨコツチで叩く)	A D *	
7	埼玉・飯能市旧名栗村	A麦打ち台 B千歯抜き	コキ	(穂打ちをせず、白の作業に進む)	脱粒脱芒/タチウスで「こなす」	B E	
8	埼玉・比企郡川島町	B千歯抜き	センバコキ/ムギコキ	クルリボウ/ムギウチ	脱芒/白に入れて杵で搗く/ノギオシ	B D E	
9	埼玉・秩父郡皆野町	B千歯抜き	コキ/ムギコキ	クルリボウ/ボウウチ、クルリブチ、コゴナシ、ノゲトリ	脱粒脱芒/立臼で軽く搗く/ノギオリ、ボツツアラゴナシ(実の残る穂をこなす)	B D E	
10	埼玉・児玉郡神川町旧神泉村	C麦を焼く	(用具なし)/ヤキホ(畑)	(穂打ちをせず、白の作業に進む)	「脱穀」/立臼と杵で搗く	C E	
11	埼玉・深谷市旧川本町	B千歯抜き	コキ/ムギコキ	フリボウ/フリボウブチ	脱粒脱芒/堅臼と大杵で搗く、堅臼に両足入れ芋を揉むように踏む/ツノオシ、ノゲオリ	B D E	
12	埼玉・南埼玉郡宮代町	人力脱穀機		クルリボウ、フルイチボウ	脱芒/白や箆の麦を杵で押す/ツノオシ	* D E	
13	埼玉・さいたま市旧岩槻市	A麦打ち台	ムギブチダイ/ムギブチ、タナブチ	クルリボウ/ノゲオシ、ボウブチ、ムギコナシ	脱粒脱芒/タチウスに入れて「落とす」	A D E	
14	東・武蔵村山市	B千歯抜き	センバコキ	クルリボウ/ボウウチ	脱芒/臼杵でねじりながら搗く/ノゲオシ	B D E	
15	東・西多摩郡檜原村	B千歯抜き	カラハシ/ムギコギ(畑、庭)	クルリボウ/ボウウチ(夜の土間)		B D E	
16	東・青ヶ島村	C麦を焼く	(用具なし)/ムギヤキ	(ムギタタキ(板)で叩く)	「脱穀」/臼と杵で搗く/ムギオシ	C * E	
17	東・神津島村	B千歯抜き	コキハシ (ホロイという竹串で摘み取る)	(記載なし。左に同じか?) (穂打ちをせず、白の作業に進む)	(記載なし)/ムギオシウスとムギオシキネで「おす」	B E	
18	神・川崎市	B千歯抜き	カナゴキ	クルリボウ/ボウウチ、ムギボウウチ	(記載なし)/「タチガラ(二斗張り臼)でムギオシをする」/ムギオシ	* E	
19	神・平塚市	B千歯抜き A麦打ち台	ムギコキ、マンガ/ムギコキ	クルリボウ/ムギブチ、ボウウチ	脱芒/桶で左右の足をすり付けるようにして踏む、堅臼と麦搗き用の杵で搗く/ノゲオシ	A D E	
20	神・伊勢原市	B千歯抜き A麦打ち台	マンガ	クルリボウ/ムギブチ	脱芒/四斗樽の中で踏む、二斗白臼と杵で搗く/ノゲフミ、ノゲオリ	B D E	
21	山・富士吉田市新屋	A麦打ち台 C麦を焼く	ムギブチダイ センダン、ムギブチ(畑) (用具なし)/ムギヤキ(畑)	クルリンボウ/クルリウチ(畑) ボウウチ、ボウウチヨウ/ボウウチ		A D F	
22	山・富士吉田市新倉	A麦打ち台	センダン、ムギブチ	(穂打ちをせず、白の作業に進む)	脱粒脱芒/棒打ちの代わりにカエリのついた餅搗き臼に麦を入れ、足で踏む/ムギフミ	A F	
23	山・南巨摩郡早川町奈良田	B千歯抜き	コバシ/ムギコギ(畑)	ムギウチ/ムギウチ (穂打ちをせず、白の作業に進む)	脱粒脱芒/雨天時や家族のみの場合、家の板の間に麦を広げ、白と杵で搗く/ムギオシ	B D E	

を二斗張りと呼ばれる臼で搗き、ノゲを取ってから、一俵五斗入りの俵に入れて保存した。同じ作業をヨヅキといい、近所のモヤイで、二人一組となるサシヅキでやったという例もある。3戸田市ではコオシといって、二斗張りの臼で搗き、ノゲを取ったという。9秩父郡皆野町では、粒の残った穂(ボツツアラ)を「立臼に入れて杵で軽く搗く」という。12宮代町では、ノゲのあるものを「臼やザルの中に麦を入れて、これを木の杵で押す」という。打つのではなく、軽く搗くという意味と考えられる。一方、14東京都武蔵村山市では、餅搗きのアゲヅキに使われる大型の杵で、ねじりながら搗くので大変な労力がかかったという。脱芒のコツを表現したものであろう。ただ、搗くときに藁縄製の輪を入れて実を循環させたというのは、米搗きはともかく、脱穀ではこの一例だけであり、疑問が残る。

一方、踏むというのは2上尾市で、四斗桶に笨一杯(一斗五升)入れ、桶の中に裸足で入ってこれを踏むと、五分程度でノゲが落ちたという。以下、「裸足」とことわりのない報告も、同様であろう。

深谷市旧川本町、神奈川県平塚市、伊勢原市などでは、搗くと踏むの両方があった。11深谷市旧川本町長在家では、「大麦のノゲやヒエル(穂のついたままの未熟の粒)は堅臼と大きな杵で搗くか、炎天下で両足を堅臼の中に入れて芋をもむように踏んだ」という。

19平塚市では、「直径四尺、深さ二尺くらいのハンギリ桶に麦を入れ、左右の足をすり付けるようにして踏んでノゲを折ったり、堅臼に入れて麦搗き用の杵で搗い」たりしたという。ハンギリ桶を使って足踏みする場合には、麦を天日干ししてその熱が残っているうちがよい。手伝わされた子どもにとって、素足に麦は熱いし、ノゲが刺さるし、いやな作業だったという。20伊勢原市では、四斗樽などの中に入れて素足で踏んだり、ニトバル(二斗張り)の臼に入れて杵で搗いたりした。干した麦粒

が温かいうちすぐに行ったという。

この作業の目的は、上尾市で、二パーセントほど残ったノゲを処理するというように、脱芒とするものが大半である。ノゲオシ、ノギオシ、ツノオシなどの呼称は、それを示す。ただ、皆野町で、粒の残った穂を臼で処理することをボツツアラゴナシというように、脱粒の要素もあった。また、コオシ、ヨヅキが「小おし」「余搗き」だとすると、唐竿の「おし」(打ち)作業の補足という意味ととらえられる。

さて、18川崎市も臼で搗く例であるが、報告の文章が少し難解で、誤解を生みやすいので、引用する。

ボーチの後は篩でふるって唐箕にかけて選別した。大麦の場合には、さらにこれをタチガラでムギオシをした。タチガラは木で作った臼で、直径二尺もあり、杵も大きかった。この臼で二回行くと、一俵分が搗けたので、そのタチガラを二斗バリといった、これを唐箕で選別し、俵に詰めた。

ムギオシの説明はなく、臼と杵の説明が精白の麦搗きのことを連想させるが、穂打ち後に脱粒・脱芒するため、臼と杵で搗き、唐箕による選別後に俵に詰める、と理解される。臼と杵で麦を搗いて脱穀することを、ムギオシと表現しているのである。

#### 唐竿の代替としての臼・杵の作業

以上のように、唐竿による二次脱穀の作業の後処理として、臼・杵の作業が広く行われていた。それに対して、山間部や山寄りの地域では、唐竿に代わるものとしても、臼・杵の作業が行われた。

7埼玉県飯能市旧名栗村では、千歯扱きで扱いても粒の落ちない穂は、クルリボウでボウチをするが、その代わりに、「タチウスでこなして粒にし、またノゲを取り除いた」こともあった。ボウチのように場所を必



要としないからである。また、ムギウチダイで穂を落とし、物置の土間でボウチをしてノゲを取った後、唐箕と篩の選別後にも残った麦の穂は、藁打ちに用いるヨコヅチで叩いて脱穀する例もあったという。白・杵は、槌と同様、比較的小規模経営で、狭い立地の作業に向いていたのである。

22 山梨県富士吉田市新倉では、一次脱穀には、ムギヤキといって麦の穂首に火をつけて穂を落とす方法と、センダンと呼ばれる麦打ち台に打付ける方法があった。火で麦が傷むのを避けたい場合には、センダンを叩いた。ここでは、二次脱穀としてボウチ、ボウチヨウなどと呼ばれる唐竿でボウチ作業をしたが、その代わりに、上縁に返しをついた餅搗き用の臼に麦を入れ、足で踏む場合もあった。これはムギフミといい、大枘二升を素足で踏んでノゲを除くものであった。ムギフミ後には、コボシと称して、天気の良い日に庭に麦粒を広げ、二日ほどかけて乾燥させた。後述のとおり、同市内では、同じ臼を餅搗きと脱穀で共用していた。

23 山梨県南巨摩郡早川町奈良田では、一次脱穀としてコバシ（千歯扱き）で麦を扱いた後、ムギウチと称し、庭に広げた穂をムギウチ（唐竿）で叩いて二次脱穀をした。これは共同作業であるユイで行ったが、梅雨時で雨が降ると、家の中の畳を上げた板の間で、白と杵で麦を搗いた。この作業をムギオシといった。家族だけの場合も、この方法を用いたという。雨天や人手の多寡により、唐竿に代えて白・杵の作業としたわけで、平地とは異なる地形や栽培条件などにおいて、こうした作業がより意味を持つていたということであろう。

東京都の離島の報告には、さらに特徴あるものが見られる。

16 青ヶ島村では、サツマイモを原料とした焼酎に麦麴を用いており、その麦の栽培に関わる事例が報告されている。「麦引き」と称して「麦は刈らずに根から引く」「麦焼き」として「麦芒を焼く」「麦叩き」として「ムギタタキ（羽子板状の板）」で叩いて脱粒する。「麦押し」と称

して、その「脱粒した麦を白と杵で搗いて脱穀する」という。

17 神津島では、茎丈が四尺以上の麦は鎌で根刈りし、コキハシ（千歯扱き）で扱ぐが、三尺以下の短い麦は、ホロイという竹串で穂を摘み取り、二日ほど干し、ムギオシウス（木の大臼）とムギオシキネ（大きな横杵）で「おす」（搗く）。ちなみにムギオシキカイという手動の脱穀機が大正十二、三年頃に入ったが、普及に三、四年かかったという。報告にそれ以上の記載はないが、作業呼称ではなく、用具名にムギオシを含む。

「麦の脱穀作業の例」には入れていないが、利島では、麦は根刈りして寝かせて干し、竹の台の上で穂を焼き落し、白で「おす」ことで脱穀した。昔は、カラウス（地唐臼）で踏んだともいう。

離島の事例は特殊な場合も多いが、奈良田とも共通することから、白・杵による脱穀をムギオシといい、白を「おす」ということは、かつて広い地域に存在していたと考えられる。

ここで一覧表からムギオシ呼称に関わるものを抜き出してみる。

地域	一次脱穀	二次脱穀	唐竿等	二次脱穀	白杵
1 浦和	.. A	ムギウチ	／ムギオシ	／コオシ	
16 青ヶ島	.. C	ムギヤキ	／ムギタタキ（板）	／ムギオシ	
17 神津島	..	（穂摘み）	／作業を省略	／呼称なし	「おす」
18 川崎	.. B	（麦扱き）	／ボウチ	／ムギオシ	
23 奈良田	.. B	ムギコギ	／作業を省略	／ムギオシ	

旧浦和は、二次脱穀の唐竿の作業をムギオシという。筆者は以前、浦和を含む埼玉県南・東部ほかの地域の、唐竿の作業呼称としてのムギオシの事例を紹介した。<sup>(8)</sup> こうして見ると、埼玉県外では、一次脱穀では A B C ほか、さまざまな方法を取り、二次脱穀で唐竿ほかの作業を挟みつつ、最後は白・杵の作業で収束し、それをムギオシと称している。埼玉

県内の事例はむしろ特殊なものであり、唐竿の後処理にせよ、唐竿の代替にせよ、臼・杵による脱穀こそがムギオシであると考えられる。ここで、臼・杵で麦を搗くのに、ムギオシ、ノゲオシなどといって、麦搗きとはいわないことに注意しておきたい。

### 日記の「麦おし」「おしもの」と臼・杵

次に、近世・近代の日記の関係記事と、臼・杵を見てみよう。

埼玉県坂戸市赤尾の林家文書・天保九年「年中万日記帳」の中に、「麦刈」「麦打」「おしもの」という一連の記述がある。<sup>9)</sup>この「おしもの」は、麦脱穀との関係がわがわがが、明確ではない。東京・多摩の山寄りの地域の日記には、これが臼・杵の作業であることを明確に示すものがある。

あきる野市の「儀三郎日記」には、文久三年四月二十七日「麦かり」「夜麦を申候」という記述がある。これには「麦を押し・麦搗に同じ」と編者注があり、五月二日「雷」「八ツ半時より大雨ニテ休ミ、麦搗仕候」という本文にも、「麦搗・麦臼を使って脱穀する。狭い場所ですら一人で、仕上りもよい。大量の麦の場合は大勢で棒打ちをする」という編者注がある。元治二年五月二十日「麦かり、大麦蒔仕舞、夜麦おし仕候」には、「麦おし・麦臼でつく」という注が付されている。本文にも一例、明治二十七年七月八日に「麦こなし、午後一時頃仕舞、本年ハ臼おしにいたし候」とあり、臼に直接触れている。明治五年以前には旧暦による季節とのずれはあるが、いずれも麦脱穀の時期であり、「麦を押し」「麦搗」「麦おし」が、みな麦を臼で搗くこととされている。<sup>10)</sup>

八王子市の「石川日記」には、慶応四年五月二十一日「内二而大麦臼二而こなす」、明治十六年七月四日、五日「大麦臼搗」、明治二十三年七月八日「内の者二而臼デ大麦押し」、明治三十五年七月二日「麦臼ニテ押し」、

明治四十四年七月三日「大麦臼おし 四人踏から臼、タチ臼ニテ」、同七月四日「大麦押しにて」<sup>11)</sup>など、いくつか臼の記載がある。

詳細は別稿に譲るが、「麦搗」とあっても、これらが精白（精麦）のための麦搗きでなく、脱穀に関わるものであることは、いずれも麦刈り直後であること、要所に見える「麦こなし」「こなす」などの記述から疑いない。

これらの臼のうち、「踏から臼」は踏み唐臼、地唐臼であろうが、「臼」「タチ臼」などは、どのようなものだろうか。「儀三郎日記」を翻刻・刊行した五日市町郷土館（現在あきる野市五日市郷土館）が刊行した『郷土の民具』には、「麦臼」が掲載されている。「儀三郎日記」の編者注の「麦臼」は、これを念頭に置いていた可能性が高い。ただ、「儀三郎日記」や「石川日記」には、「大麦、臼搗」「麦、臼二而搗」などもあるものの「麦臼」という言葉そのものは見当たらない。

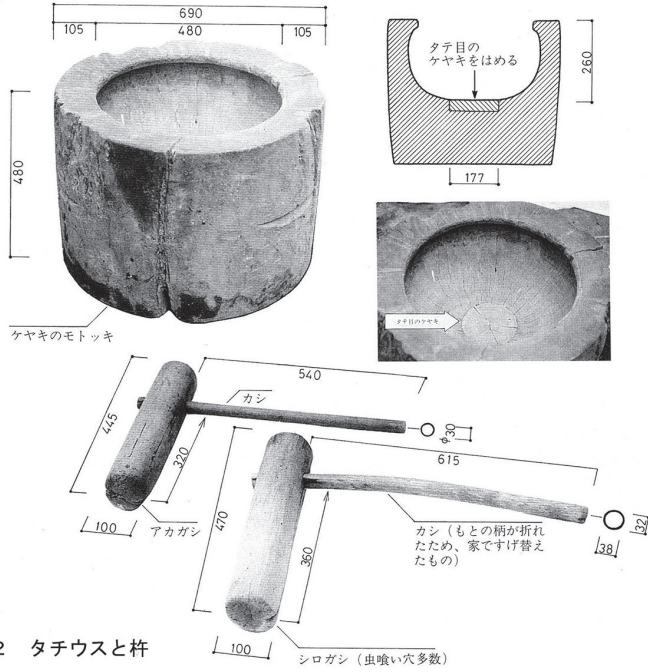
「麦臼」は、ケヤキ製で外形七四、内径四九、深さ三二、高さ四九センチメートルという大きな臼である。臼の「内側の湾曲が美しいカーブ」であることにより、杵で打つにつれて麦粒は下から上にせりあがって臼中央に崩れこみ、循環するという。

麦臼 麦つき用の臼である。餅つき臼はもっと細い。麦をつくといいのは麦の穂を粒にすることで、ふつうは棒打ちでやるが少量の麦なら臼でついた方が仕上りがよい。麦臼には底の中央部に円形のくぼみがある。このくぼみは杵で粒をつぶさない為で、ここにたまたまた麦がクッションの役をする。<sup>12)</sup>

この説明には「麦つき用」とあるが、「麦をつくといいのは麦の穂を粒にすること」というから、精臼ではなく脱粒・脱芒であり、この臼が「日記」でいう「麦おし」に使われたことを示している。

一般に、米搗き臼は「二斗張り臼」と称し、餅搗き臼よりも大きく、



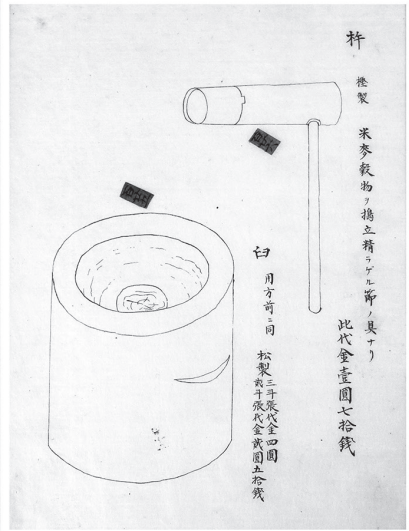


2 タチウスと杵



1 麦臼と臼の内側

- 1 五日市町立五日市町郷土館編『郷土の民具』1986  
提供：あきる野市 五日市郷土館
- 2 宮本八恵子「麦作とその用具」  
『所沢市史調査資料別集16 所沢の民具1』1992  
提供：所沢市文化財保護課



3 「南豊島郡農具一式之図」

4 「荏原郡農具図」

- 3-4 「東京府下六郡農具図」東京都公文書館蔵  
提供：東京都公文書館

臼の内部は縁が内側に沿って、搗いたときに穀物が外部に飛び出さないようになっている。これを搗く杵も、餅搗き用の細くて軽い杵とは異なり、太くて重く、打撃面がくぼんだ形になっている。<sup>(13)</sup>埼玉、東京などでも、二斗張りと呼ばれる米搗き臼が、麦の脱粒・脱芒に用いられていた。米搗き臼と「麦臼」とは、違うものなのだろうか。

「麦臼」の説明では、内底面のくぼみ（径一三・五センチメートル）を、搗かれた麦の緩衝のためとする。山梨県富士吉田市では、かつて麦や雑穀を日常食としており、臼はどの家にも必ず一つはあって、粳から玄米にする、玄米を精白する、餅を搗く、味噌用の大豆をつぶすなどのほか、穀物のノゲオトシにも用いられたという。「こうした用途のために臼には返りがあり、搗く部分は椀型にくぼみがつけてある」<sup>(14)</sup>という。これも、搗くためにくぼみがあったと読み取れる。

確かに搗き臼にくぼみはあるものの、その理由は異なる。町田市域の米搗き臼は、杵が当たって摩擦することを想定し、内底面に別の円盤状の木をはめ込んで使用できるように、あらかじめくぼみが設けられていた<sup>(15)</sup>という。

小麦の殻を剥がしたり、大麦を精白したりするのに使用された、埼玉県所沢市の「穀搗き用」のケヤキ製の臼は、杵の当たる面に縦目のケヤキ材をはめ込んであったという。これはケヤキ製で外形六九、内径四八、深さ二六、高さ四八センチメートルで、内底面のくぼみの径一七・七センチメートルである。「麦臼」同様に「内側の湾曲が美しいカーブを描いている」とともに、「上縁は、搗くとき穀が飛び出さないよう内側へ張り出して」いた。<sup>(16)</sup>「麦臼」も、上縁が内側に張り出しているのは写真からわかる。このように、少なくとも見かけ上は同じ仕様であることから、「麦臼」も穀搗き臼と同系列のものであり、底のくぼみも同様のものであろう。

公的な臼・杵の史料を見てみよう。明治時代の東京府下の農具を調査し記録した「東京府下六郡農具図」（東京都公文書館蔵）<sup>(17)</sup>は、南豊島・北豊島・南足立・南葛飾・荏原・東多摩の各郡の農具図が収録されたものであり、いずれも臼と杵が掲載されている。そのうち、「荏原郡農具図」には、右から、餅搗き杵、餅搗き臼、麦搗き杵、搗き臼、米搗き杵などが描かれている。

餅搗き臼は、「餅春臼 代価一円五十銭 口径一尺三寸 縁六寸 高一尺五寸」で、「餅団子等ヲ搗クニ用ユ 椶ヲ以テ造ル」という説明がある。搗き臼は、「椶春臼 代価四円 口径一尺五寸 縁七寸五分 高一尺七寸」で、「米麥ヲ搗クニ用ユ」と説明がある。同じ椶（ケヤキ）製であるが、大きさや価格は大きく違う。

杵については、「餅春杵 代価三十銭」「麦春杵 代価三十銭」「米春杵 代価七拾銭」とあり、それぞれ、「一尺六寸 二寸」「一尺五寸 二寸」「一尺八寸 二尺二寸」と寸法が付されており、前二者は二尺二寸を「二寸」と略しているものの、杵の長さと同柄の長さを示しているらしい。このうち「米春杵」には、「米ヲ搗クニ用ユ 椶ヲ以テ造ル 麦搗餅搗ノ杵モ同樹ヲ用ユ」と説明がある。

この図の片隅に、穀物を搗く作業用の、布状のものと、縄状のものが描かれている。前者は作業用の当て布（革）で、「前当テ 代価十銭 米麥ヲ搗クトキ杵ノ柄当ル処ニ帯ス 革或ハ雑巾ノ如キモノニテ造ル」とある。後者は米搗きのワツカなどと呼ばれるもので、「米春輪 代価三十銭」「米ヲ搗クトキ米ノ返転ノ加減ニ用 井戸綱ノ古キ縄ヲ以テ造ル」とある。

さて、この「椶春臼」は、いずれも内側の湾曲や上縁の張り出しが見られ、底面にくぼみが表現されているように見える。

「南豊島郡農具一式之図」には「杵」と「臼」が描かれ、杵には「椶

製 米麦穀物ヲ搗立精ラゲル節ノ具ナリ 此代金老円七拾銭」、白には「用方前二同 松製 三斗張代金四円 式斗張代金式円五拾銭」とあり、米麦兼用である。この白の図には、くぼみと見えるものがより明確に描かれている。寡聞にして餅搗き臼では、このようなくぼみや円盤状の木をはめ込むことは知らない。消耗の激しい脱穀や精白などのための構造であったのであろう。稲作地域では「米搗き」用とされるが、これらの白は米麦共通の穀搗き用としての基本仕様を持っていたのであろう。

ただし、米搗き用という中には、内底面のくぼみや内部曲面、上縁の張り出しなどが無いものもあるにはある。<sup>(18)</sup>

杵について、埼玉県行田市の例では、穀搗き臼に対応する搗き杵は、柄長五〇〜六〇、杵長五〇〜六〇、杵径一二〜一七センチメートル、一〇キログラム前後と大きく、対象物に触れる杵の先端部分にへこみがあり、摩耗した先端を交換できるものもあつた。<sup>(19)</sup> 荏原郡や南豊島郡、東多摩郡などの搗き杵の図にも、先端を交換できるものが見られる。「麦臼」の場合も同様と考えられるが、付属する杵の先端部分は写真では明確ではない。

### 麦搗きの実態

多摩地域の日記を見る限り、「麦おし」「おしもの」は、白・杵による脱粒・脱芒であり、精白のための「麦搗き」とは別物であつた。

それでは、もう一方の麦搗きとは、どのようなものだったのか。脱穀が「おす」「麦おし」や「こなす」「麦こなし」であるなら、精白は「しらげる」であり、「麦しらけ」<sup>(20)</sup>であつた。

民俗事例を見ると、埼玉県志木市では、「米三俵麦一俵」といい、麦搗きは米搗きの三倍大変な作業だったと伝えられている。<sup>(21)</sup> 麦の精白は、二度の麦を搗く作業を必要とした。秩父郡皆野町の例では、白に麦粒を

入れ、水で湿つた状態で搗いて荒皮をむき、唐箕で選別して荒皮（アラヌカ）を除き、天日干しした後、再び水に浸して白で搗くと、内皮がとれて白くなる。これを再び干し、篩でふるって内皮（アゲヌカ）を除いた<sup>(22)</sup>という。西東京市旧保谷地域の例では、麦を水に浸けておき、二斗張りの臼で一時間ほどかけて一斗五升分を搗いた。二斗搗けないのは糠が出るからである。このイチバンムギツキの後、唐箕で選別し、実を一日天日干しして、さらに仕上げ搗き（シアゲムギという）をした。七人家族の場合、春に一〇俵、秋に一〇俵ずつ搗いた。麦がとれると、秋にはその麦を搗くが、春に搗く分は俵に入れて蔵や物置に保存しておき、春蚕の出で忙しくなる前、二、三月頃に搗いた<sup>(23)</sup>という。

秩父郡小鹿野町伊豆沢では、二度の麦搗きをそれぞれアラツキ、シアゲツキといい、足踏みで杵を上下させるシーソー構造の地唐臼を用いて、ツキテ（踏む役）とハツコミテ（たえず白の中央に麦を寄せる役）の二人で行つたという。「石川日記」の「踏から白」である。労力を軽減するために、こうした地唐臼を用いるほか、水車を利用する場合も多かつた。<sup>(24)</sup> 脱穀は新暦の六、七月、乾燥した麦粒を俵や吠に収納するまでであり、精白の「麦搗き」はその後、別に時期を選んで行われる気骨の折れる作業であつた。白と杵を共有し、同じように搗く作業ではあつても、脱穀に「麦おし」という、「麦搗き」とは別の呼称が求められたのには、それ相応の理由があつたのである。

### 麦搗きと「麦おし」との交錯と錯綜

埼玉、東京のほかにも、「麦おし」「おしもの」に関する資料はあるが、脱粒・脱芒と精白との呼称の区別が曖昧であり、「搗く」と「おす」の立場が逆転する状況も見受けられる。

山梨県南巨摩郡早川町奈良田では、雨天時、唐竿によるムギウチ（穂



打ち)の代わりに、屋内で行う作業をムギオシと称し、ムギオシノキゲと呼ばれる杵と臼で脱粒・脱芒を行った。一方、水車で麦を精白する作業をムギツキといった。<sup>(25)</sup>ここでは両者が区別されている。

ところが、土橋里木氏によると、奈良田の民家の板の間は、「臼を置いて麦おし、餅つきをする屋内用作業場」であり、大・中五、六本の杵が備えてあった。そして、「大形の杵はオシモノキゲと云って麦押しに用い、コスイ(小さい)方はモチキゲと呼んで餅搗き用である<sup>(26)</sup>」という。オシモノキゲは、ムギオシノキゲと同様のものと推測される。ただ、ここでのオシモノキゲの「麦押し」作業が、脱粒・脱芒なのか、精白なのか判断としない。大森義憲氏によると、奈良田では、「臼は直径二尺くらいの大臼で、どこの家にも必ずある。杵は大きいのは麦を搗く杵をオシモノキネといい、餅を搗くのをモチギネという<sup>(27)</sup>」。

要するに、奈良田では、杵は、餅搗き用のほかに麦搗き用があった。そしてこの杵を用いて麦を搗くこと自体を「脱粒・脱芒も精白も」「麦おし」「おしもの」といつていたのである。藤森二三氏によると、この屋内作業場では、「(一)大きな臼でもろこし・粟をつく。(二)もちつきをする」などとしたという。雑穀の脱穀や、水車がない時代の麦の精白にも、この杵が用いられた可能性が高い。そうした重要な杵が、「搗きもの」杵ではなく「おしもの」杵であるとするれば、「おす」が「搗く」より優位にあるということではないだろうか。

野本寛一氏による静岡県下田市須崎小白浜の海女(明治四十四年生まれ)の聞き書きは、次のようにいう。

六月には麦コナシを終えた麦を、朝ムシロに広げて干しておき、午前はワカメを採取した。昼からは干しておいた麦の精白をした。

麦の精白のことを「麦押し」と呼んだ。<sup>(29)</sup>

六月かその直後とすると、この「麦押し」は精白ではなく、脱粒・脱

芒ではないか。しかし、記述どおり精白であるとする、「麦おし」が麦を搗くことを代表し、精白をも示しているのとらえられる。いずれにしても、「麦おし」という呼称の存在感が示されている。

### 「麦おし」の断片

過去の民俗調査の報告などの中には、臼・杵に関わるムギオシという言葉が断片的な形で散見する。

栃木県那須塩原市旧黒磯市内には、両面を彫った、特徴的な臼があった。浅く彫られたミカンナリという面は、堅杵で真ん中を搗くと、両壁から穀物が順にせりあがってくるようになっていて、穀物の脱穀などに用いたという。杵には、キギ(横杵)とテツキギ(手杵。堅杵)があった。

臼が、硬い木で作られる一方、打杵であるキギは柔らかいシナノキ製で、餅搗き、味噌作り、「ムギオシなど」に使用したという。テツキギは力が入らないので硬い楓製で、餅搗きには使わず、ムギオシや味噌作りに用いたという。<sup>(30)</sup>しかし、ムギオシについての説明はない。比較的早い時期の調査報告には、このように説明なくムギオシという言葉が用いられており、ものにより意味が異なっている。

茨城県内にも「麦おし」の報告がある。鹿嶋市では、大正時代の日記の(年不詳)七月二十日に「麦おし 二石八斗」の記事があるが、詳細は不明である。<sup>(31)</sup>収穫物と見るなら、脱穀の意味であろう。

別の地点不明の報告では、麦の脱穀のため、夜中に起きて「焼き穂」という方法で麦を焼き、「穂首をウスでこなした」。その後、「麦つき」では三日間かけ、「三番つき」で仕上げるが、「麦おしのウスは二斗五升入り」だったという。<sup>(32)</sup>ここでは、脱穀と精白の臼を「麦おしのウス」という。

ムギオシといわないまでも、麦を搗くことを「おす」という地域はさらに広い。岩手県九戸郡軽米町の百姓・淵沢圓右衛門による弘化四年『軽邑耕作鈔』の「大麦、小麦」記事中に、「種圃一斗五升（押さず麦・遅麦等也）」とあり、種子の貯蔵必要量は反当たり一斗五升で、品種には「押さず麦」「遅麦」などがあるということが述べられている。編者注には、

どちらも小麦の品種名。「遅麦」はいうまでもなく晩生種のことだが、「押さず麦」とは脱稈調製が不要なものとの意味であろう。当地では脱稈作業を「押す」という<sup>(33)</sup>

とある。小麦ではあるが、脱稈は「押す」ものであった。

ここで東京に戻ってみると、国分寺市の国分寺村名主家出身の医師・本多雖軒の日雇人記録の明治十六年二月に、次の記載がある。

十二日「一 壹人 同人（雇人音五郎のこと） 米白キ麦押シ」

十三日「一 壹人 同人 麦押シ后山ノモヤ負ヒ来ル」<sup>(34)</sup>

「米白キ」は「米搗き」であろうが、「麦押シ」は季節からして精白の麦搗きであろう。米は「白き」、麦は「押シ」と使い分けていたと見える。麦に関しては、脱粒・脱芒も精白も、搗くこと自体を「麦押シ」と呼んでいるとされる。

奈良田のムギオシキゲ（キネ）といい、神津島のムギオシキネ、ムギオシウスといい、「麦おしのウス」といい、米よりも麦を多く扱う地域で、穀搗き用の臼・杵を米搗き用といわないのは当然としても、麦搗き用でなく「ムギオシの」というところに、ムギオシという呼称の優位が示されている。

東日本の広い範囲で、臼は杵で「搗く」ものでありながら、ときには「おす」ものであった。混乱はあるにしても、埼玉、東京、神奈川などに、精白は「麦搗き」「搗く」であっても、脱穀は「麦おし」「おす」と

使い分ける傾向を持つ地域があったことは確かなのである。

関東を離れるとムギオシと呼ばれる事例は少ないが、岩手県陸前高田市では、「振打」と呼ばれる唐竿によって麦の「穀落し」をした後、臼と手杵（竪杵）で「芒を砕く」ことを、「麦押」または「芒押」とい<sup>(35)</sup>たという。これは、関東の唐竿と臼・杵による二段階の脱穀と同列のものである。また、岩手県奥州市、旧胆沢郡の『胆沢町史』には、「のぎおし 麦打ち作業後に臼に入れて手杵でついた芒をとる作業」という記述がある。かつて鈴木棠三氏は、岩手県胆沢郡や気仙地方の麦打ち歌に「麦押唄」というものがあり、埼玉県入間郡で麦の穂打ちをノゲオシと<sup>(37)</sup>いうことから、胆沢の麦押しも麦打ちではないかと述べていたが、胆沢では二次脱穀の臼・杵の作業であつたらしい。

ところが、岩手県下閉伊郡岩泉町では、乾燥させた麦を「からみ台」というものに打ちつけて穂を落とし、その穂を、男たちが長い柄のついた槌で、まわりながら打った。その作業をムギオシという<sup>(38)</sup>。これは、麦打ちであつて、埼玉県内で唐竿による作業をムギオシということと対比されるとともに、棒や槌・杵状の用具などの作業であることに注目される。ここで想起されるのは、佐々木長生氏によるモミヨウシの研究であり、青森・岩手・秋田でモミオシ、宮城でアオオシ、山形でモミヨシ・モミヨス、福島でモミヨウシなどと呼ばれる東北の稲脱穀における糠打ちが、唐竿ばかりでなく、棒や槌・杵状の用具、臼と竪杵など、さまざま<sup>(39)</sup>な用具によって行われていることである。

#### 麦脱穀における「麦打ち」と「麦おし」

麦脱穀における臼・杵は、平野部では、唐竿の作業の後処理にとどま<sup>(40)</sup>るが、山間部やその周辺では、麦焼き後の処理、雨天時などの唐竿作業の代替など、より重要な役割を担っていた。近世や明治期の日記によつ



ても、それはうかがえる。八王子市の「石川日記」には享保七年以降、福生の「武州伊奈村石川家最中日記帳」には嘉永七年以降、あきる野市の「儀三郎日記」には文久三年以降、「麦おし」「おしもの」などの記載がある。<sup>(40)</sup>作業内容がわかる幕末以降では、これらも穂打ちではなく、臼・杵の作業であり、主として雨天時などの唐竿の代替としての作業を表わすものととらえられる。

ムギオシは、おおむね近代の関東においては、臼・杵の作業であった。これは、麦の脱穀の工程の中で、麦打ち台や千歯扱きによる一次脱穀の後の二次脱穀に当たり、間に唐竿の作業や選別、乾燥などを挟みながら、麦を俵や吠に収納する最終段階に直結していた。「麦打ち」は、「麦打ち台で麦の穂を打ち落としたり、その穂を穀竿で打って、芒を取り除き、脱粒させること」<sup>(41)</sup>であり、多人数で行われる過酷な労働ではあるが、ある意味では麦脱穀の花形であった。南関東の麦脱穀についての調査研究は厚く、なかでも特徴的な用具である唐竿の形態については多くの分析がなされた。<sup>(42)</sup>それに比べると、臼・杵の作業への関心は薄かった。しかし、唐竿に象徴される「麦打ち」に対して、臼・杵の担っていた「麦おし」は、麦脱穀を取束させる根幹部分というべきものであった。

多摩地域の複数の日記に記録されながら、民俗調査で把握されづらかったのは、かつて広く存在していたであろう「麦おし」「おしもの」という呼称が、近代以降に一部地域限りのものになっていったこと、「麦おし」「おしもの」という呼称に象徴されていた臼・杵の作業が、脱穀の花形である「麦打ち」と食料調製の要である「麦搗き」とに挟まれて目につきづらかったこと、民俗調査が行われる時代には作業そのものも消えつつあり、被調査者の記憶においてもその存在感が薄れていったことなど、いくつかの理由があるだろう。それでも一覽表に掲げたような調査記録があることについては、それぞれの研究者や各市町村史の関係者の

方々のご努力に感謝するほかない。

### 「おす」と「搗く」、「麦おし」の変遷

最後に、臼・杵の作業であっても、麦の脱穀では「麦おし」「おしもの」「おす」などといい、「搗く」とはいわないこと、古くから臼は「搗く」ものであったのに、あえて「おす」ということ、唐竿の作業も臼・杵のそれもムギオシということの理由について触れたい。

前述のとおり、近代の関東では、臼と杵、すなわち搗き臼と搗き杵（横杵）が米・麦の脱穀や精白に用いられており、そのうち麦の脱穀がムギオシと呼ばれていた。しかし、大島暁雄氏によると、竖杵に代わって横杵が普及したのは十八世紀半ば以降とされており、それは米を大量に精白することを要因とした変化と考えられている。<sup>(43)</sup>一方、搗き臼についても、その成立、普及にはさまざまな経緯があったと考えられる。そうすると、これまで述べてきた関東の臼・杵によるムギオシは、十八世紀後半以降、いわば米の精白技術の進化に対応した臼・杵の改良に便乗して成立したものと考えられる。

古くは関東でも、稗から分離した麦穂の脱粒・脱芒作業は、東北地方と同じように、棒や槌・杵状の用具、臼・竖杵などによって行われていたと推測される。それらの作業がおしなべて「麦おし」と呼ばれ、「おす」と表現されていたのではないだろうか。近代にさしかかった頃、それらはおおむね唐竿の作業と搗き臼・搗き杵の作業に引き継がれた。穂打ちはもっぱら唐竿の作業（D穂叩き法のムギオシ、ノゲオシ、ムギウチ、ボウチ、ボウウチ）に収斂し、その後処理や代替としての脱粒・脱芒は搗き臼と搗き杵の作業（E穂搗き法のムギオシ、ノゲオシ、ヨヅキ、コオシ、ツノオシ）となった。そのために、どちらの作業もムギオシと呼ばれ、「おす」と表現された、と考えられるのである。

付記 東北地方の「籾おし」と呼ばれる籾打ちについては、別稿『「おす」と表現される東日本の穀物脱穀」(近日予定)に述べた。

図版の掲載をご承諾いただいた大館勝治氏、宮本八恵子氏、所沢市教育委員会文化財保護課、あきる野市五日市郷土館、東京都公文書館、ご教示をいただいた飯塚好氏、小川直之氏、畠山豊氏、久野俊彦氏、神かほり氏、西郊民俗談話会でご教示をくださった大島建彦氏、小池淳一氏ほかの皆様へ感謝申し上げます。久野氏が館長を務める「ただみ・モノとくらしのミュージアム」の図録と、「生家では白・杵で麦を脱穀した」という飯塚氏のお話と、小川氏のご著述と、畠山氏の数々のご助言に、導いていただきました。

#### 注

- (1) 拙稿「埼玉県における麦脱穀の作業呼称とその機能―「麦おし」「芒おし」と「クルリボウでおす」こと」『埼玉民俗』四八、二〇一三
- (2) 別稿「関東の近世・近代の日記に見る「麦おし」作業」を予定している。
- (3) 大正二年『日本主要農作物耕種要綱』(農商務省農務局編、大日本農会、一九一三)／昭和十二年『麦類耕種要綱』(農林省農務局編、大日本農会、一九三七)
- (4) 小川直之「日本の脱穀具と脱穀法」『府中市農具展 農具は語る多摩の近代』府中市教育委員会、一九九三
- (5) 『麦類耕種要綱』
- (6) 小川直之「日本の脱穀具と脱穀法」
- (7) 田原久「北部伊豆五島の生活」『東京都文化財調査報告書第七』東京都教育委員会、一九五九
- (8) 拙稿「埼玉県における麦脱穀の作業呼称とその機能」
- (9) 林信海著、小暮利明翻刻・注記・解題(『日本農書全集四二 農事日誌』農山漁村文化協会、一九九四)
- (10) あきる野市五日市郷土館編『儀三郎日記 幕末の元締 安政六年から慶応四年まで』あきる野市教育委員会、一九九八、『儀三郎日記2 明治の元締 明治二年より明治一年まで』二〇〇一、『儀三郎日記3 明治の元締

- 2 明治二年より明治二年まで』二〇〇三、『儀三郎日記4 明治の元締3 明治二年より明治三年まで』二〇〇三、『儀三郎日記5 明治の元締4 明治三年より明治四年まで』二〇〇四
- (11) 八王子市郷土資料館編『石川日記』(一〜一五)、八王子市教育委員会、一九七七〜一九九三

(12) 五日市町立五日市町郷土館編『郷土の民具』一九八六

(13) 佐々木長生「餅つき白」野本寛一編『食の民俗事典』椋風舎、二〇一一

(14) 奥脇和男「食生活」『富士吉田市史民俗編第一巻』一九九六／くほみそのものの指摘は、「東やまとの生活と文化」(武蔵野美術大学生活文化研究会〈代表田村善次郎〉編、東大和市教育委員会、一九八三)の報告にもある。

(15) 畠山豊氏ご教示

(16) 宮本八恵子「麦作とその用具」所沢市史編さん室編『所沢市史調査資料別集一六 所沢の民具』一九九二

(17) 『農耕図と農耕具展 町田市立博物館図録八五』(一九九三)に、藤塚悦司氏の解説とともに図版が紹介されている。

(18) 埼玉県幸手市の例。埼玉県さきたま資料館編『北武蔵の農具』一九八五

(19) 『北武蔵の農具』

(20) 文化二年四月二日、七日条。『石川日記』八、一九九一

(21) 三上重勝「志木地方の麦作について」『埼玉民俗』五、一九七五

(22) 中田稀介「皆野町近辺の戦前の麦作と農機具の変遷」『埼玉民俗』五

(23) 「下保谷の民俗」保谷市、一九八六

(24) 埼玉県立歴史資料館編『麦作りとその用具 埼玉西北部を中心に』一九八五

#### 五

(25) 増田昭子「焼畑の村・奈良田の食生活」『粟と稗の食文化』三弥井書店、一九九〇

(26) 土橋里木「山村女性の働き(前承)」「民間伝承」一八・四、一九五四・四

(27) 大森義憲「食物」『西山村総合学術調査団編『西山村総合調査報告書』山梨県教育委員会、一九五八

(28) 藤森二三「土地条件からみた西山村の民家」『西山村総合調査報告書』

(29) 野本寛一「麦の記憶―民俗学のまなざしから」七月社、二〇二一

(30) 『栃木県民俗資料調査報告書八 那須山麓の民俗 黒磯市百村・板室地区』栃木県教育委員会、一九七二

- (31) 『鹿島町史第三卷』一九八一
- (32) 読売新聞社編『茨城の民俗』鶴屋出版部、一九六七
- (33) 吉沢典夫翻刻・現代語訳・解題「軽邑耕作鈔」『日本農書全集二』農山漁村文化協会、一九八〇
- (34) 「明治一四年五月二五日日雇月日人数控」『国分寺市史料集四 本多雖軒関係文書』一九八四
- (35) 細谷敬吉「山村風物詩其の二 佐藤竜治遺稿より」陸前高田老人クラブ連合会編『陸前高田ものがたり第六集』同会、一九八六
- (36) 『胆沢町史九 民俗編二 胆沢町編、胆沢町史刊行会、一九八七
- (37) 鈴木棠三「唄と臼と」『民謡研究』二の二〇五、一九三八、二〇八（『説話民謡考』三一書房、一九八七）
- (38) 岩泉民間伝承研究会編『いわいずみふるさとノート 一九八五』同会、一九八五・七
- (39) 佐々木長生「会津農書」と脱穀用具(二)―モミヨウシについて―『民具マンスリー』二五―七、一九九二・一〇）ほか多数。
- (40) 八王子市郷土資料館編『石川日記』(一)―一五)、八王子市教育委員会、一九七七―一九九三／福生市古文書研究会編『武州伊奈村石川家歳中日記帳』二・三、一九八二・一九八三、福生市郷土資料室『武州伊奈村石川家歳中日記帳』福生市教育委員会、一九八八／あきる野市五日市郷土館編『儀三郎日記』(一)―五) あきる野市教育委員会、一九九八―二〇〇四
- (41) 「むぎうち」『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇三
- (42) 大館勝治「いわゆるクルリボウについて」『埼玉歴史資料館研究紀要』六、一九八六／畠山豊「連柳覚書」『民具マンスリー』一八一―一〇、「連柳小報告」『埼玉民俗』一五、一九八六／関東民具研究会編『南関東のクルリ棒』一九八八／町田市立博物館編『多摩の民具 くるり棒』一九九〇／後藤廣史「クルリ棒とその地域性」『府中市農具展 農具は語る多摩の近代』／加藤隆志「神奈川県のクルリボウ」、鈴木通大「クルリ棒・ヨコオ・麦打台拾遺」『神奈川県民俗調査報告二〇』一九九九／ほか多数
- (43) 大島暁雄「堅杵とその文化」宮本馨太郎編『講座日本の民俗四 衣・食・住』有精堂出版、一九七九

表「麦の脱穀作業の例」出典

- 1 内田賢作編『大久保地区民俗調査資料』「麦作」『浦和市史調査報告書第五集』一九七八／小川直之「麦とサツマイモ」『浦和市史民俗編』一九八〇
- 2 関孝夫「麦作」『上尾市史第一〇巻別編三』二〇〇二
- 3 山下英世「畑作」『戸田市史民俗編』一九八三
- 4 加藤隆志「潮地ルミ・堀江清隆」『生業』『新修蕨市史民俗編』一九九四
- 5 柳正博「麦」『鳩ヶ谷市史民俗編』一九八八
- 6 岩野邦康「麦作り」『上福岡市史資料編第五巻民俗』一九九七
- 7 大館勝治「麦作り」『名栗の民俗 下』二〇〇八
- 8 松本周一「比企郡川島町の麦作」『埼玉民俗』五、一九七五
- 9 (執筆者なし)『皆野町誌資料編五民俗』一九八六／中田稀介「皆野町近辺の戦前の麦作と農耕具の変遷」『埼玉民俗』五
- 10 金沢浩・岡本一雄「生産・生業」『神泉村誌民俗編』二〇〇三
- 11 新井栄作「川本村長在家の麦作と麦稈細工」『埼玉民俗』五
- 12 関孝夫「麦作」『宮代町史民俗編』二〇〇三
- 13 小川直之「麦」『岩槻市史民俗史料編』一九八四
- 14 戸井田克己「かわりゆく農業」、外立ますみ「民具が語るモノとくらし」『武蔵村山市史民俗編』二〇〇〇
- 15 増田昭子「檜原村の麦作り」『横須賀市博物館報』二七、一九八一(増田昭子「粟と稗の食文化」『三弥井書店、一九九〇』再録)
- 16 松原和史「村の生活」『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村教育委員会、一九八四
- 17 田原久「北部伊豆五島の生活」『東京都文化財調査報告書第七』東京都教育委員会、一九五九
- 18 小坂広志「麦作」『川崎市史別編民俗』一九九一
- 19 小川直之「畑作」『平塚市史別編民俗』一九八二
- 20 小川直之「大麦・小麦」『伊勢原市史別編民俗』一九九七
- 21 増田昭子「水かけ麦の栽培」『新屋の民俗』富士吉田市、一九八五(「水かけ麦の民俗」として『粟と稗の食文化』再録)
- 22 増田昭子「大麦」『新倉の民俗』富士吉田市、一九八七
- 23 増田昭子「焼畑の村・奈良田の食生活」『粟と稗の食文化』

# 岩船山の孫太郎天狗と孫太郎稲荷

林 京子

## 一 岩船山の天狗信仰

岩船山高勝寺（栃木県栃木市岩舟町）は生身地藏しょうじくが出現した霊場である。ここには地藏の他に「霊場を守護するために舞い降りた」天狗「孫太郎尊」が祀られている。現在の高勝寺では「孫太郎尊」と称する、稲穂をくわえて飛行する狐に乗るカラス天狗のお札を頒布している（写真1）。この姿は、本堂裏山の中腹にある「孫太郎尊拜殿」の中の厨子の尊像の姿である。現在の高勝寺では孫太郎尊のものにはあまり関心が持たれていない。<sup>(1)</sup>

「孫太郎尊」は、近世には真言系の修験者によって奉斎されていたと推測され、天台宗である高勝寺の文書類には記載はない。幕府が作らせた十八世紀初めの街道絵図2には、岩船山内にはっきり「孫太郎」と記された堂舎が描かれている。孫太郎尊には火防の他、商売繁盛、作物の豊作、子孫繁栄などのあらたかな御利益があるという。

岩船山の天狗が「孫太郎」という固有名を持つのは、上杉謙信が「松田孫太郎」という北条方の武将を「岩船山の鬼神のように勇猛だった」と評したとされること



岩船山

写真1 岩船山孫太郎尊のお札

により、天狗と孫太郎が習合したという説3が通説とされるが、これは近世に入つての松田氏の子孫たちの仕官運動との関連が示唆され

るだろう。また、茨城県稲敷市江戸崎甲の不動院（天台宗）に、孫太郎尊とよく似た絵像が「伝稲荷神像」として伝来する4ことは、近世の北関東の天台宗寺院には、このような尊格がしばしば祀られていたことを示唆する。さらに、街道絵図の郵政博物館本は「孫太郎」を「孫太良」と表記している。日光近隣の徳次郎は「とくじら」と読む。「孫太郎尊」と山王一実神道で祀られる「摩多羅神」5（＝高勝寺を守護するもの）との関連もまったく荒唐無稽ではないだろう。

## 二 佐野市の孫太郎神社

岩船山の近隣の栃木県佐野市伊賀町には「孫太郎稲荷」と呼ばれる神社があり、伊賀町の人々によって守られている「伊賀町鎮守 孫太郎神社」である（写真2）。天慶の乱で鬼神のような平将門を武力と呪力で討ち果たした藤原秀郷は、佐野市周辺の伝説的な英雄である。秀郷は将門の調伏のために佐野市春日岡に寺院を建立し地主神を祀った。その後、保元・平治の乱で焼けて荒廃した寺は、文永年間に俊海上人によって再興され、秀郷八代の孫で怪力無双の藤原（足利）孫太郎家綱が地主神の神社を修復した。そこで人々はその神社を「孫太郎明神」と呼んで尊崇したという。家綱は十二世紀はじめの人である。

後述するが、佐野氏は秀郷の子孫を称して佐野市唐沢山の唐沢山城に拠った。その後、十七世紀初めに唐沢山城は春日岡の地に移転



写真2 佐野孫太郎稲荷



して佐野城（春日岡城）となった。元々春日岡にあった寺院（後の惣宗寺）は現在地に移転した。しかし惣宗寺の鎮守でもあった孫太郎稲荷はそのまま春日岡城の鎮守となり、春日岡城がなくなったあとともそこに残り、大正六年に伊賀町に遷座したという。<sup>6</sup>この神社の主祭神は豊受姫命で、配神として宇賀魂神（穀物神）・猿田彦命（天孫降臨を助けた国津神で天狗に似ている）・豊城入彦神（下毛野君の祖）が祀られている。猿田彦がここで祀られている理由は不明である。この社は唐沢山城と春日岡城の守護神なので北を向いているといわれる。また稲荷と通称されているが、ご朱印や神紋は「羽団扇」で、天狗を示唆している（写真3）。孫太郎神社は病気なおしの霊験が著しく、参詣する人が多かったといい、現在も伊賀町の町内の人々によって大切に守られている。

縁起によれば孫太郎神社は、近世は「孫太郎明神」として信仰されていた。神紋や御朱印は、天狗と習合していた近世の祭神の姿を示唆している。日光地域は中世には吒枳尼天信仰が盛んで、近世にそれが摩多羅神と集合し、さらに近世後期になるとそれが「稲荷」と理解されていくという先行研究がある。<sup>7</sup>

佐野市の孫太郎神社の世話人の話や縁起によると、奈良の薬師寺にも孫太郎稲荷があるという。佐野の孫太郎稲荷は薬師寺の孫太郎稲荷とな

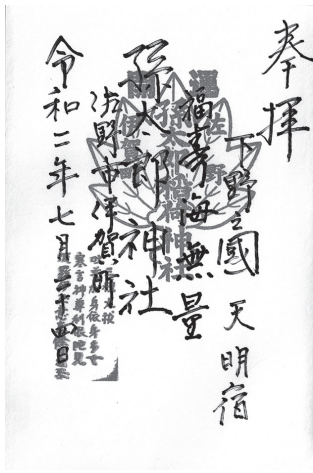


写真3 佐野孫太郎稲荷御朱印

んらかの関連―例えば京都に住んでいた藤原（足利）孫太郎家綱が薬師寺の孫太郎稲荷も修復したなどの経緯―があるのではないかと関係者は考えているようであるが、そのよう

な理解は、奈良の孫太郎稲荷神社から照会が来たことがきっかけであると推測される。では薬師寺の孫太郎も天狗なのだろうか。

### 三 奈良市の孫太郎稲荷神社

孫太郎稲荷神社は奈良市の薬師寺に包括されている。薬師寺の鎮守八幡宮は薬師寺の南、休岡にあるので休岡八幡宮と呼ばれている。この神社は寛平年間（八八九〜八九七）に薬師寺別当采紹大法師が勧請したとされ、嘉暦二年（一二二七）に本殿が焼失し、十五世紀に再造営や修復が行われた。<sup>8</sup>孫太郎稲荷は薬師寺南門のすぐ東、薬師寺と休岡八幡宮の間に鎮座する（写真4）。現地で官司にお話を伺うと、「孫太郎稲荷は領主によって姫路を所払いされたので、社人がご神体を持ってあちこちさまよい、縁があつて寛政ごろに当地に来てここに鎮座した」「姫路には元孫太郎稲荷があつた場所が残っているが、そこにはなにもないらしい」「姫路からの参拝者もたまにやってくる」ということをご教示いただいた。なぜ寛政年間なのか尋ねると、そのことを記した奉納額があるというので拝見させていだいた。

その扁額は大正十一年に角谷丑松によって奉納された木の額で、大きな字で「無拠此度進退是迄御恩以時折報可申候以上孫」とあり、そのあと小さめの楷書で「当県孫太郎稲荷社也元鎮座播州姫路龜山之里寛政之昔移当休岡幸之森出立之際右有書置之文岡山侯当奇異之



写真4 奈良薬師寺の孫太郎稲荷



思状以当為家室今在近頃播州姫路在人牛尾政治郎者写真回国之次納當社乃題於額以祀神前為紀念」と書かれている。

ところで寛政三年に版行された『大和名所図会』の薬師寺の項を見ると、明らかに現在の孫太郎稲荷と同じ場所に小祠が描かれているが、『大和名所図会』にはそれについての記載もない。『奈良市史 社寺編』は「孫太郎稲荷社には本殿・拝殿・社務所があり、姫路にあったものを寛政の頃にこの休岡の地に移した」とあり、寛政期移転説が通説になっていることがわかる。

孫太郎神社には立派な石の玉垣があり、そこには近隣の人々の名前が多数記されている。また「正一位孫太郎稲荷大明神」という奉納旗が上がり、扁額にも「正一位孫太郎稲荷神社」とある。官司の話では、この孫太郎稲荷は商売繁盛、子孫繁栄の御利益が著しく、今も人々の尊崇が深いそうだ。境内には「おさんば」と彫られた石碑があり、近世にはなにか子授けなどの信仰が寄せられていたらしい。境内には狐の像の他、お百度石もあり、衆庶の信仰の篤さを語っている。御朱印やお札を頂いたが、特に天狗を思わせるものは見られなかった。

また、沿革史をみても、足利孫太郎家綱の時代に休岡八幡宮になんらかの修復があったという史実は確認されていない。ただ後述する埴岡真弓氏から、奈良・薬師寺の孫太郎稲荷の由緒として、佐野孫太郎義綱なる人が登場することをご教示いただいた。薬師寺の孫太郎稲荷を紹介する社ガイドにも同様の記述がある。薬師寺の孫太郎稲荷が佐野の孫太郎神社に照会を行なったのは、佐野孫太郎義綱との関連についてであると推測される。

佐野の孫太郎神社を再興したのは十二世紀の孫太郎家綱である。孫太郎義綱は建武期（十四世紀半ば）の佐野の武将で、史



写真5 姫路の孫太郎稲荷と刃の宮地藏尊



写真6 姫路の孫太郎稲荷の内部

料が存在するが系図上の位置づけは不明で、佐野氏庶流と推測されている。<sup>(1)</sup>佐野氏は藤原秀郷子孫と称し、藤原（足利）孫太郎家綱を誉ある先祖として綱を通字としていた。義綱についての詳細な考究は今後の課題である。では姫路の孫太郎は天狗なのだろうか。

#### 四 姫路市の孫太郎神社

姫路駅から南に徒歩五分程の姫路市豊沢町に「春日神社」があり、境外末社に「孫太郎稲荷」がある。<sup>(2)</sup>「孫太郎稲荷」は春日神社の数十メートル南に「刃の宮地藏尊」と隣り合わせて建っている（写真5）。平成二十七年（二〇一五）に両者の覆屋が整備された。さらにその南には「鍛冶屋公園」がある。

覆屋に入ると、確かに孫太郎稲荷には社殿がなく、「孫太郎稲荷大神」と彫られた石碑が建っているだけだった（写真6）。この石碑は忠魂碑などによく見られるような黒い石板状のもので、それほど古いもの

ではないようであるが、年紀銘などはなかった。隣の「刃の宮地藏尊」には「史蹟刃の宮地藏」という石碑と、由来を刻んだ石碑があった。「刃の宮地藏尊の由来」とは、以下のようである。

伝説的な刀鍛冶の三条宗近が、宇佐八幡宮に奉納する神剣をこの場所で作ろうとした時、孫太郎という狐が来て相槌役になって助けた。

三条宗近は姫路で亡くなり、彼の供養のために彼の仕事場のあった場所に、彼の帰依していた地藏を祀ったのが刃の宮地藏である。

ここにも「お百度石」があり、往時は衆庶の信仰が篤かったことを示唆しているが、なぜそんな由緒ある神社が所払いになって奈良まで流れて行ったのか。どうして能の演目「小鍛冶」がそのまま姫路の伝説として受容されたのか。京都の刀鍛冶が姫路に来て、ここで没したという伝承がなぜできたのか。また能には地藏の話はないのに、三条宗近と地藏がセツト化されているのはなぜなのか。

「小鍛冶」は造刀をモチーフにした能で、室町時代中期に成立したといわれる。そのストーリーは以下のものである。

一条天皇の御世（九八六〜一〇一一）、橘道成は国家鎮護の太刀を差し出すよう命じられ、刀工として京の三条に住む小鍛冶宗近が指名された。宗近は適任の相槌役がないことを嘆き、氏神の稲荷明神に祈請すると、明神の化身の童子が現れて剣の威徳を語り助力を約束して去る。そこで壇を設け祝詞をあげて宗近が剣を打とうとしたとき、神使の狐が童男姿で相槌に現れる。出来た神剣を宗近は小狐丸と名付けた。

宗近は京都の青蓮院そばに住居があったとされる歴史上の人物である。<sup>13</sup> 村戸弥生氏は「小鍛冶」の周辺を詳細に考察し、「稲荷神が鍛冶神として鍛冶の人々の信仰を集めて」おり「漂泊する琵琶法師によって語られる小狐説話と、同じように漂泊する鍛冶の人々の三条宗近の伝承が各地

で交流することは十分考えられる」と言う。この指摘は非常に重要である。そこで管見の限りではあるが、姫路の近世史料から孫太郎社や孫太郎狐について調べた結果の要約を以下に示す。（文中の傍線は筆者によるもので括弧内は筆者による補足である）

資料①「芝原村 春日社」『播磨鑑』（十八世紀頃に成立）

・往昔祭の日には奈良春日大社から神鹿が来た。

・鍛冶か堂という小堂がある。これは往昔三条小鍛冶宗近が宇佐八幡宮へ神剣を奉納しようと思いい筑紫に下る時、当国にて病に倒れた。ある夜霊夢に「宇佐まで行こうとするお前の志はよくわかった。八幡神は先年播磨の松原に遷られたので、ここで神剣を作り松原神宮に納めよ」という神勅を受けたが、適当な相槌がなく困っていた所、稲荷の神狐が刀工となって来てくれて相槌を打ってくれたので「孫太郎」と号し、完成した剣を松原神宮（松原八幡宮）に奉納した。今も松原八幡宮の神宝である。

・宗近は姫路で没し、里人は有名人の遺跡として彼が帰依していた石地藏を安置した。ここに参詣する人は口の病を通れられるとして、歯等が痛む人は口に櫛の葉を口に入れて、無言でそれを指さすと、この堂に案内してもらえらる。うっかり口をきくと病は癒えない。（この歯痛を治す地藏はその後「歯の宮地藏尊」とも「刃の宮地藏尊」とも表記されるようになる）

・孫太郎狐は都に帰らず、この里の井上九郎右衛門の家に住みついていて。毎年十一月二十三日にお祭りを行う。<sup>14</sup>

資料②「鍛冶が堂」『村老夜話集』<sup>15</sup>（十九世紀半ばの成立）

・資料①と同じ伝承が収録されている他に「無抛此度進退是迄御恩以時折報可申候以上孫」という「芝原社所持の孫太郎書置」が記載され、

追書に「元和八壬戌年十月十九日夜」とある。

・春日大明神社（前述の春日神社）の社職は、永禄元年（一五五八）の井上九郎左衛門以来、代々井上家が勤めている。

・別当歓喜寺は元和五年（一六一九）に不届の儀により追放された。

資料③「傳説・孫太郎狐の国拂」『姫路城史』中巻<sup>18</sup>。

・孫太郎狐は芝原村に留まったが、一人暮らしの老婆が孫太郎狐に食物を与えていた。孫太郎は老婆の恩に報いる為姫路城の本田家（姫路領主）の金蔵に忍び込み千両箱を盗み出して老婆に与えたことが露見し、藩主本田忠政から国払いを命じられ、やむなく書置きを残して姫路を去ったという。

元和五年の姫路城主は本多忠政であるので、資料②・③の時期は一致している。しかし、三条宗近は十一世紀の人なので、彼を助けた後、孫太郎狐は姫路に六百五十年以上留まったことになる。橋本政次氏もそれには疑問を呈している<sup>19</sup>。筆者は姫路の伝承にはまったく疎いため、姫路の伝承や歴史について多くの著作のある埴岡真弓氏に教えを乞うた所懇切なご教示をいただくことができた。特に「本多氏家中にも下野佐野氏ゆかりの家臣がいたので、佐野の孫太郎稲荷が姫路に勧請された可能性はゼロではない」というご教示は重要であろう。後述するように、孫太郎狐と本多忠政とは結びつきが深い。

また、姫路は刀鍛冶が盛んな土地柄であり『姫路名所案内』には「鍛冶屋田」と呼ばれる田があったと伝承されている。刀匠でもある鍛冶職が芝原村の周辺に居住していた可能性があり、彼らは「束物」と呼ばれる大量生産品も造っていた。そのような「束物」は、城下町姫路では常に受容があったと考えられるという。『播磨鑑』に見られる孫太郎狐を祀る「十一月二十三日の祭り」とは、但馬地方（播磨にもわずかに残

る）の「二十三（にじゅうそう）」という習俗との関連があるという。

これは農耕の神としての稲荷信仰とも関係するものであるという。姫路城下では能楽が盛んな土地柄であったこと、また「刃の宮地蔵尊」は、本来は現在地の近くに境界のカミとして祀られていた、既に存在した地蔵に三条宗近の伝承が合体した可能性もある、という貴重なご教示もいただいた。

小括すると、芝原村周辺の鍛冶職の人々の信仰と能の物語、稲荷信仰が、境界のカミとして祀られていた石地蔵と結合して孫太郎稲荷と刃の宮地蔵尊になり、何らかの理由で近世のはじめに孫太郎稲荷は破却されたようだ。また伝説の成立が江戸時代初期ごろとすると、姫路に移住した下野佐野の武士たちによって下野の孫太郎稲荷が、新天地で故郷を偲ぶ神社として祀られた可能性も完全に否定できない。姫路の孫太郎稲荷の成立には重層的な人々の信仰があるようだ。

## 五 まとめ

岩船山の孫太郎尊と佐野市の孫太郎神社は天狗を祀っている。岩船山と佐野市の中間にある唐沢山は天狗伝説を持つ<sup>20</sup>。戦国期には山上に唐沢山城が造られ、城主佐野氏は英雄藤原秀郷の子孫を称した。五来重氏は「戦国の」城内鎮守はすべて吒枳尼天である」と断言している<sup>21</sup>。このことは全て実証されてはいないが、怨敵調伏や味方勝利を祈願するのに吒枳尼天以上に有難い尊格はないのは事実だろう。岩船山の孫太郎も佐野の孫太郎も唐沢山との関係が強く示唆され、稲荷、吒枳尼天、天狗という類似した尊格と「荒人神」<sup>22</sup>的な鬼神の如き武人への信仰の混濁が推測される。

一方薬師寺の孫太郎稲荷は姫路から来た孫太郎狐を寛政年間に祀ったものであるという。姫路の孫太郎稲荷は能の「小鍛冶」を仲介として稲



荷神とキツネ信仰が合体したものと考えてよいだろう。それに石地藏が合体して一体化していることは非常に興味深い。

「孫太郎の国拂い」とは、元和年間に姫路城下で春日社の支配をめくり別当と社職が争い、別当の追放により、別当と強く結びついていた末社の孫太郎社が破却されたことと考えられる。孫太郎社の破却に先立ち、慶長十四年頃から姫路城内に妖異が相次ぎ、その年の十二月に池田輝政や夫人ら三名宛に「遠江の天狗が他の天狗を誘って城内に妖異を起こし、城主一家を調伏しようとしている。それを退けるために城内に八天堂を建てて護摩の修法を修めよ」という趣旨の書状が届いたという。その後輝政が病気になったこともあり、城内に長壁社が遷座された。これらの書状は『歓喜院文書』に収められている。<sup>(23)</sup>この歓喜院と、春日神社の別当歓喜寺の関係は不明であるが、『姫路城史』によれば、池田輝政や夫人たちが姫路城に入城したのは元和になってからである。また元和八年は忠政の嫡子忠刻と家康の孫千姫との間に生まれた幸千代が前年に三歳で亡くなったため、様々な寺院で供養を行い、男子出生祈願を行った年である。中村禎里氏は、キツネ信仰は稲荷神と一応独立した信仰として存在しえたことを示唆し、その例として姫路のオサカベ神とキツネの関係を挙げている。<sup>(24)</sup>孫太郎稲荷の破却は案外大きな出来事の周辺事項である可能性も示唆され、今後の課題である。

しかし元和八年は一六二二年であり、休岡八幡宮に孫太郎稲荷が来たという寛政年間は百六十年後になる。前述したように寛政三年（一七九一）の『大和名所図会』に描かれた薬師寺と西の京八幡宮の図には、現在の孫太郎稲荷と同じ位置に鳥居と小祠が描かれている。また、薬師寺の孫太郎稲荷の奉納額には、元和八年の姫路の「孫太郎書置」が最初に書かれている。

十七世紀後半には休岡八幡宮の末社として存在したなんらかの社が、

寛政年間に「孫太郎稲荷」として信仰されるようになったということだろうか。その場合、元の社が孫太郎稲荷に置き換わったとも考えられるし、姫路とは異なる孫太郎稲荷社だったものが、姫路から来た孫太郎稲荷になったとも考えられる。奈良でも藤原（足利）孫太郎家綱の子孫を自称する佐野孫太郎義綱が創建したからその名がある、という佐野の孫太郎神社と同じパターンが繰り返されている。

もともと播磨の小鍛冶伝承は宇佐八幡宮の分霊とされる松原八幡宮とつながりがある。松原八幡宮との縁で休岡八幡宮の末社として落ち着いたということも、十分考えられる。休岡八幡宮や奈良の孫太郎社の沿革史や、佐野義綱についての精査も今後の課題である。

天狗と吒枳尼天と稲荷と摩多羅神は、中世以来、その姿や機能を複雑に互換し合いながら今日に至っており、<sup>(25)</sup>一元的な理解や把握は困難である。佐野の孫太郎神社が天狗の棲む唐沢山城の鎮守で、稲荷と理解されていること、岩船山の孫太郎尊は唐沢山の天狗が飛んできたと理解されていることを勘案すると、戦国期に唐沢山城に祀られた吒枳尼天が、岩船山高勝寺や春日岡山惣宗寺を守護する摩多羅神と習合し、鬼神の如き武人とも習合していったことは十分考えられる。

実は岩船山高勝寺にも妖刀伝説がある。大正期に焼失するまで、本堂二階に奉納された刀剣は、所有者を殺人者にしてしまう妖刀として、近隣の恐怖の的であったという。<sup>(26)</sup>今やアニメや特撮の聖地とされている岩船山中では、物語の中でさまざまなものゝ合体する。<sup>(27)</sup>岩船山では地藏と武人と天狗と刀剣が合体し、佐野市では天狗と武人が狐と合体して稲荷になり、姫路では狐と刀剣が石地藏と合体して稲荷になっている。姫路の孫太郎稲荷と佐野の孫太郎稲荷が、奈良で合体したとも見える。稲荷も天狗もその信仰は複合的で、人々の願いを強く反映した御利益を持ち、それゆえに信仰者と固く結びつく。俚諺に天狗も狐も悪戯好きで

人を惑わせて喜ぶという<sup>(28)</sup>。各地の「孫太郎の社」は現世利益のあらたかさで地域の衆庶に篤く信仰されており、その信仰の根は深く重層的なのである。

【謝辞】

埴岡真弓先生（播磨学研究所）には、多くの貴重なご教示を賜りました。また奈良葉師寺の孫太郎稲荷の宮司様にはお忙しい中お話を聞かせていただきました。本当にありがとうございます。

注

- (1) 高勝寺パンフレットが、「狗賓剛」の「賓」を「浜」と誤読しているのもその表れであろう。
- (2) 「太田 八木 築田 天明 犬伏」『五街道分間延絵図』第二巻、東京美術一九八九年。
- (3) 高橋成「孫太郎天狗の信仰」『下野民俗』四七、二〇一四年。
- (4) 「特別展図録常州江戸崎不動院」茨城県稲敷市立歴史民俗資料館、二〇二二年、図版八一。
- (5) 現在は朝日森天満宮が宮司を兼務し、町内会が管理を行っている。
- (6) 「孫太郎神社縁起」伊賀町鎮守孫太郎神社、二〇〇三年。
- (7) 北口英雄「神像と吒枳尼天騎狐像―日光山の神々との習合」『栃木県立博物館紀要（人文）』二九、二〇一二年。
- (8) 奈良市史編集審議会編『奈良市史 社寺編』吉川弘文館、一九八五年、三四八頁。
- (9) 注（8）に同じ。
- (10) 「孫太郎稲荷神社」『奈良寺社ガイド』<https://nara-ji-ya.info/> 二〇二三年四月三日閲覧。
- (11) 「義綱軍忠状」『南北朝遺文 関東編1』東京堂出版、二〇〇七年。
- (12) 兵庫県神社庁編『姫路の神社』神戸新聞総合出版センター、二〇〇五年、二〇五頁。
- (13) 川口陟「三条宗近の事蹟（その一）」『刀剣史料』第5号、一九五九年。
- (14) 村戸弥生『遊戯から芸道へ』玉川大学出版部、二〇〇二年、二四五―二六

一頁。

- (15) この日は新嘗祭の日であり、山の神を祀る日であることも多い。
- (16) 福本勇次『村老夜話集―播磨の地誌』『村老夜話集』刊行会、二〇一五年、三六頁。
- (17) 奈良市の孫太郎稲荷神社の大正十一年の奉納額にもこの文言が書かれている。
- (18) 橋本政次『姫路城史』中巻、姫路城史刊行会、一九五二年、七八一頁。
- (19) 注（18）。
- (20) 出居博『戦国唐沢山城 武士たちの夢の跡 増補・改訂』佐野ロータリークラブ、二〇一七年。
- (21) 五来重「稲荷信仰と仏教」『稲荷信仰の研究』山陽新聞社、一九八五年、七五―一七〇頁。
- (22) 志田諱一氏は、平安末期に茨城県常陸太田市に土着した小野崎通延やその子の通成は、武威と靈威で周囲の人々に荒人神として崇敬を受けたことで大きな勢力となったことを指摘する。中世の神仏観と武人信仰の重なりが興味深い。小野崎氏もまた藤原秀郷の子孫を称していた。志田諱一「小野崎氏をめぐって」『続東海村の今昔』峯書房、一九八四年。
- (23) 中村禎里「狐の日本史 古代・中世びとの祈りと呪術」戎光祥出版、二〇一七年、二七七頁。
- (24) 中村禎里「狐の日本史 近世・近代篇」日本エディタースクール出版部、二〇〇三年、六三―七六頁。
- (25) 山本ひろ子『摩多羅神』春秋社、二〇二二年、一二六頁、同『摩多羅神の姿態変換―修業・芸能・秘儀』『異神』第二章、平凡社、一九九九年。
- (26) お玉の怨念の刀の話は現住職も聞かされたという。『大平町史』にも記載があり、お玉を祀った祠も栃木市大平町に現存する。
- (27) 岩船山を撮影地とする特撮ドラマ、例えば「スーパー戦隊シリーズ」では、それぞれの戦士の乗り物が合体して巨大ロボットになる。「仮面ライダーシリーズ」では、バイクや武器がライダーと合体し新しい変身形態となる。
- (28) 例えば、『暴太郎戦隊ドンブラザーズ』第二十話「はなたかえれじい」では、主人公たちが全員が思い上がった結果、鼻が高く伸びて「天狗になってしまふ」。この回のロケは岩船山の孫太郎尊の下でも行われた。



# 富山県魚津市古鹿熊におけるトリモチ猟

森 俊

## 一、トリモチ（鳥糞）

モチノキ科モチノキ属の植物（モチノキ、イヌツゲ、クロガネモチ）、およびヤマグルマ科ヤマグルマから取られる粘着性の物質のことで、春から夏にかけてこれらの樹皮を水に浸けて腐敗させ、秋になってから臼で搗いて組織片を洗い流してトリモチを採取する。粗製品は赤モチと呼び、漂白したものを白モチという、鳥類の狩猟に使われるほか、子ども遊びとしての捕虫に使用されてきた。<sup>1)</sup>

戦後は畑の小麦を長い間咬んでつくった。鳥をおとりかごに入れ、トリモチを塗った三〇センチほどの枝をかごに差し込んでおくと、仲間がそれに止まり木ごと落下したところを捕獲する（『鳥類学辞典』<sup>2)</sup>）。この小麦を咬んでトリモチとする方法は、先の樹皮を加工してトリモチとする方法よりもより新しいと考えられる。

## 二、富山県魚津市古鹿熊のトリモチ猟<sup>3)</sup>

トリモチの材料は、麦芽糖を作り、口で長時間ガムのように咬んでいたら粘りが出てきてトリモチになる。麦芽糖を材料としたトリモチの製造時期は、鳥猟の行われる秋である。

トリモチ猟による捕獲対象は、シロハラ、ツグミ、アトリ、アオジ、ホオジロであった。

これらの鳥が止まりそうな木の上枝に、柿の実、その他の果実など鳥のエサを付けておき、下枝にトリモチを付けておき、さらにその下に網を括り付けておく。

鳥が上枝の木の実に引き付けられて下枝に止まると、トリモチに足を取られてその下の網に入る。

捕獲した鳥は、訓練して来秋の鳥猟の餌とした。

このように、当地のトリモチは、樹皮利用ではなく、より新しい麦芽糖利用のものであった。先の『鳥類学辞典』の記述と類似する。

いずれにしろ、富山県内では数少ないトリモチ猟に関する伝承である。

### 【註】

(1) 『日本民俗大辞典』二〇〇〇年、吉川弘文館

(2) 『鳥類学辞典』二〇〇四年、昭和堂

(3) 同地、出身の谷山賢一氏よりご教示

## 雑報

### 月例談話会

毎月第三日曜日に行われております月例談話会は、当面は申し込み制といたします。参加申込は、会のホームページをご覧願います。変更等、逐次ご確認願います。

### 第八三三回 令和五年三月一九日

只見町立只見小学校の日米友情の人形（青い目の人形） 久野 俊彦  
実家を片付けるまで 水野 道子

台湾の水子供養 陳 宣聿

孫太郎を探して―その二 林 京子

鏡渭覚書―近世会津の真言宗僧と陰陽道 久野 俊彦・小池 淳一

観音寺本『安部懐中傳曆』の位置 小池 淳一

犬供養習俗を背景とした流行神 榎 美香

「榎おし」から推測される「麦おし」の過去 榎本 直樹

信濃町の現状（三） 大島 建彦

### 休会 令和五年四月

### 第八三四回 令和五年五月二一日

七夕の「竹飾り」と七夕伝説 史 乃琛

只見町瀧泉寺蔵（諸尊種子）における顔を描いた種子 久野 俊彦

観音寺の馬頭観音―川越の石仏調査― 金井塚正道

銚子の清明伝説 小池 淳一

ムギオシとモミオシの分布 榎本 直樹

### 信濃町の現状（四）

大島 建彦

### 『西郊民俗』バックナンバーのPDF掲載

ホームページに会誌『西郊民俗』PDFの掲載を始めました。『西郊民俗』バックナンバーのページで、該当号の「PDF」をクリックすると、表示されます。第二五八号から掲載を始めます。会誌刊行の一年後に順次掲載します。著作権は執筆者に帰属します。個人の研究目的の範囲でご利用ください。

### 問い合わせ先

会務担当（会誌送付・入退会・談話会等）

榎本直樹 〒350-1123 埼玉県川越市脇田本町二六―六

ドルチェ川越四〇九

Eメール inari@ceresoon.ne.jp

編集担当（原稿送り先）

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四―六―七

Eメール hotoisano@yahoo.co.jp

西郊民俗 第二六三号

令和五年(二〇二三年)六月十八日

〒一一二一〇〇五

東京都文京区水道二―三―一五―四〇三 小池方

西郊民俗談話会

振替口座 〇〇一八〇―二―八九四四〇